

2022年3月27日

## 世の業の眞の姿を示す主

ヨハネによる福音書 7：1～9

### ・レントの時を過ごす

今、私たちは四旬節、レントの時を過ごしています。イースターまでの約1カ月半、主イエス・キリストの苦しみを覚える時を過ごします。レントは、イエス様の苦しみを覚える時、その通りだと思えます。私たちは、そうしてこのレントの期間を過ごしていくのだと思えます。そのことを受け止めつつ、私はいつもある思いを覚えます。それは、私たちはイエス様の十字架の苦しみを理解できるだろうかと言うことです。今日のイエス様の言葉で言えば、世に憎まれる、その結果として捨てられるようにして、十字架に死なれる。この孤独と痛みを、本当の意味で私たちは知ることができるだろうかと思わされるのです。その意味で、私たちは「イエス様の十字架の苦しみを受け止めています」などと言うことは、決してできないと思えます。

ですから、毎年同じようにレントを迎えるわけですが、その年ごとに、改めてもう一度一から主イエスの十字架の道を受け止めさせていただく、そうして歩むしかないと思えます。イエス様が十字架におかかりくださったことを通して、イエス様は一体何を実現しようとしていたのか、そのことを更に深く、更に豊かに受け止めさせていただきたいと思えます。そのような思いを持って、今年もレントを過ごしたいと願うのです。その心で、今日も示されている聖書の言葉を、ご一緒に受け止めていきたいと思えます。

### ・聖書の言葉に残されていないイエス様の歩み

今日から7章に入るわけですが、聖書では6章の後に7章となっていますので、6章の出来事があって、直ぐに7章と続いているという感じがされるのではないかと思います。しかし、実際にはそうではないのです。6章から7章の間には、数か月の時間が経過しているのです。6章で、イエス様は、食べるパンを入り口として、ご自身こそが永遠の命に至らせる霊のパンであり、それを実際に食べる、受けることが必要であることを語られました。その言葉は、必ずしも多くの人たちに喜んで受け入れられたわけではありませんでした。そのような状況の中に、イエス様はおられたのです。これらのことがあったのは、6章4節によりますと過越祭が近づいた時であったことが分かります。「過越祭」とは、モーセたちがエジプトを脱出する時に、神様はエジプトの全ての初子を打たれたのですが、イスラエルの民の家は打たれず通り過ぎされた、そのことから、神様がエジプトから救い出してくださった、そのことを祝う時でした。後に、この過越祭の時に、イエス様が十字架におかかりになることとなります。です

から過越祭は、私たちがイースターを祝う時期、つまり、3月後半から4月前半の時期に行われていました。

一方で、今日の箇所には「仮庵祭が近づいた」とあります。この「仮庵祭」もまた、イスラエルの民にとって、大切な祭りの時でした。エジプトを脱出したイスラエルの民は、結果として40年間荒れ野を旅することになりました。その荒れ野での旅において、イスラエルの民は、ちゃんとした建物で過ごしたわけではなく、仮庵、仮に建てた小屋のようなものを作りそこで滞在しました。そして、それを取り壊して運んで移動する、そうして過ごしました。そうして歩んだ荒れ野の旅は、困難も多かったわけですが、しかし、神様に支えられて歩んだ時でもありました。そうして、荒れ野の旅を神様に導いていただいた、そのことを忘れないために、1年に一度仮庵を立ててそこで過ごす、そのような祭り、「仮庵祭」が行われることになりました。そして、この祭りが行われていたのは、過越祭の約6か月後、9月から10月の期間でした。つまり、6章と7章では、約半年の時が経っているということなのです。

私は、まずこのことが心に深く残りました。6章の最後で、多くの弟子たちが離れて行ってしまった、残ったのは本当にわずかな弟子たちになってしまった。それでおしまいということではなかったのです。その後も、イエス様はガリラヤの多くの場所を行き巡って、神様の恵みを伝え、時には救いの印としての御業をなされたのです。恐らく、その対象となった人たちは、名も残されていない、その意味で私たちと変わらない、本当に普通の人たちだったのです。そのような人たちに懸命に関わっておられたイエス様の姿が、浮かび上がってくるような気がします。そうして、聖書の言葉に残されていない、半年の時を過ごされていたのです。

#### ・イエス様の兄弟の思い

そして、そのような半年間をイエス様が過ごされたからこそ、イエス様の弟たちはこう言うのです。「ここを去ってユダヤへ行き、あなたのしている業を弟子たちに見せてやりなさい。公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきりと示しなさい。(3~4節)」と。弟たちは、イエス様に、ユダヤ、つまり、エルサレムへ行って、今あなたがしていることを弟子たちに見せるべきだと言うのです。この「弟子たち」とは、12弟子のようにイエス様の近くにいた人たちと言うことではなく、イエス様に関心を持っているような人たちということです。その人たちにあなたの働きを示すべきだと、弟たちは言っているのです。

この言葉には、弟たちなりの思いがこもっていたと思います。イエス様は、大いなる力を表されて、5千人を超える人たちを僅かなもので満足させられたのです。それは、本当に驚くべきことだったに違いありません。これ程の力ある業を示されたのに、

結果として、多くの人たちがイエス様の許を離れることになりました。そして、この半年間、それこそ、エルサレムから見れば、辺境のガリラヤで、ちまちま神様のことを伝え、御業をなされている。こんなことでよいのだろうかと思ったのです。そして、エルサレムに行って、それも、多くの人が集まっている仮庵祭に合わせて行って、そこで人々が驚くような業をなす。そうすれば、起死回生、多くの人たちを弟子として獲得できるのではないか。そうして、兄の評価も高まるのではないか、そういう思いなのです。これは、弟たちなりの善意です。そうして、イエス様にエルサレム行きを強く勧めることになったのです。

ところが、このような弟たちの姿を、聖書はこういう意外な言葉で表現しています。「兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。」と。ここで「兄弟たちも」とあることに注目したいと思います。弟たちの心には、イエス様の許を立ち去ってしまった多くの人たちの姿がありました。そうして、こんなに力ある業を行う兄を信じないとはどういうことかと思っていたと思います。だからこそ、エルサレムへ行って、ちゃんと分かる人たちの前で驚くべき御業をなせば、当然それ相応の評価をしてくれるはずだ、そう思っている。その意味で、弟たちは、立ち去った人たちを真逆の立場にいるように思えます。ところが、聖書は「兄弟たちも、イエスを信じていなかった」と言っているのです。つまり、弟たちもイエス様の前を立ち去った人たちと同じところに立っているということなのです。私は、最初とても意外な感じがしました。一見真逆に見える姿、しかし、そこにあるのは共通のもの、つまり、イエス様を「信じていない」人間の姿だったのです。それは、人間の罪の現実なのです。

#### ・何が問題なのか

このことが、続くイエス様の言葉によって明らかになっていくのです。「わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている」と。私は最初逆ではないかと思いました。弟たちは人間過ぎないのですから、時間に制約されている。一方で、イエス様は神の子ですから、時間に制約されず、自由に働かれるのではないかと。そう思いましたから、逆ではないかと思ったのです。しかし、イエス様が言われることは、そういうことではありませんでした。

この「わたしの時」が何を指しているのか、説明をするまでもないことだと思います。それは「十字架にかかる時」なのです。神の御子であるイエス様が、人間の罪を背負って十字架にかかり、命を捨てる、その時なのです。しかし、その時を、イエス様はご自身で自由に決めて十字架につかれるということではないのです。父なる神が定められた時にかかる。その神様の定める時はまだ来ていないということなのです。一方で、弟たちは、そのような神の時を覚えつつ生きているわけではない。自分の思い通りに、自分が欲することをしようとして生きているということなのです。そうい

う「時」を巡るずれが、ここに示されているのです。

更に「世があなたがたを憎むことはできないが、わたしを憎んでいる。」、この言葉を聞いて、弟たちは心底驚いてしまったのではないかと思います。イエス様が「世が私を憎んでいる」と言われたのですから。イエス様は自ら「世から憎まれる」存在であると明言されるのです。これは、後々十字架にかけられることになる理由でもあると思います。

とても考えさせられるのです。弟たちは、イエス様が力ある業をなしている、そうして、神様の愛についても語っている。そうであるならば、多くの人が喜んで受け入れたくれるはずだと思っているのです。それなのに多くの人が離れてしまっているのは、結局場所が悪いからだ、こんな辺境のガリラヤで働きをしているからだと思っているのです。しかし、イエス様はそんなことではないことを知っておられるのです。なぜならば、イエス様はそもそも世に憎まれる存在、そして、世に捨てられる存在だからなのです。そのことをイエス様は良く知っておられたのです。

「世は・わたしを憎んでいる。わたしが世の行っている業は悪いと証しをしているからだ。」、「世」とは、まずは人間の生きる世界ということですが、それだけではなく、そこに生きる人間をも含んでいます。イエス様は、世に生きる人間、敢えて明確にするために言えば、私たちに憎まれると言われているのです。いやいや、私たちはイエス様を憎んでいないと思っています。憎んでいるのは、イエス様のことを知らない人たちのことだろう、と。しかし、ここに私たちが抱えている本当の問題があるのです。

#### ・罪の現実

ここで世に憎まれる理由として、イエス様は「わたしが世の行っている業は悪いと証しをしているからだ。」と言われるのです。世、つまり、私たち人間が行っていることは、結局悪いということなのです。この「悪い」とは、単に道徳的な意味で悪いということではなく、神様の前で悪いということなのです。なぜ神様の前で悪いとなってしまうのか。それは、そもそも私たち人間が神様の御心が分かっていないからです。神様と私たちとの間にあるズレ、それを聖書は「罪」と表現しています。今日の弟たちに姿によく示されていますが、彼らは善意でイエス様に関わっているのです。イエス様のことを思っていていっていると本気で思い込んでいます。しかし、結局全克的な外れなことを言っているのです。

「罪」、それは、神様の思いを見失って、あたかも自分の思いが正しいという所に立ってしまう、そういう姿で現れてくるのです。人を蔑んだり、逆に羨んだりする。そういう思いは、どんなに人をそんな目で見てはならないと言われたとしても解決がつかないのです。心を入れ替えるということではどうにもならないのです。そもそも、私たちは根本から歪んでいるからです。例えば、雑草がいっぱい生えているとします。

一生懸命その雑草の葉をむしったとしても、根が残っていれば、結局また生えてくる。それと同じように、どんなに意識を変えよう、行いを変えようと思ったとしても、結局その根っこの部分が変わっていないと、そこに同じ問題が起こってしまうということなのです。

そして、この罪の現実を指摘されることは、私たちにとってとても痛いのです。自分は真っ白だと思っている人は、恐らくおられないと思います。真っ白ではないことが、自分が痛いほど分かっている。だからこそ、他者からそのことを示されると、とても痛いのです。その声に耳を塞ぎたくなるのです。イエス様は、真の光として、全てを明らかにされるのです。私たちが隠しておきたいそういう思いも全て、明らかにされる。全てが明るみに出された私たちの姿は、結局「罪人」である姿なのです。そのことをイエス様は明らかにされるのです。「世の行っている業は悪いと証しをしている」とは、そういうことなのです。だからこそ、「世は・憎む」のです。そういうイエス様の言葉を聞きたくないのです。その声に背を向けるのです。そして、自分がこうだと思っていることからだけ考えようとするのです。ここにその実例が示されています。一方で、イエス様の言葉が聞くに堪えないと思って背を向けた6章に出ているイエス様の許を離れた人たち、そして、一方でもっと人々に評価されるべきと思って、イエス様にエルサレム行きを勧めている弟たちです。結局、自分たちの思いから出ているということ言えば、そこに大きな違いはないのです。そうして、罪人である人間の姿が、ここに示されているのです。だからこそ「兄弟たちも」と、聖書は記しているのです。

#### ・神の御心としての救い

そうしますと、本当に私たちも重い気持ちになってきます。では、私たちはどうすればこの「罪」から離れることができるのかと思わされてくるのです。私たちの意識を変える、行いを変えるということでは、どうにもならないからです。一体どうしたらよいのでしょうか。

ここに、大切な言葉があります。「わたしの時はまだ来ていない」と。このイエス様の言葉は、ご自身が十字架につかれる時はまだ来てないことを意味しています。つまり、神様が定められた時があるということです。そして、その定められた時とは、一体どういう時であったのでしょうか。人間が7章の時と違って、もっとイエス様の言葉に耳を傾けるようになった時でしょうか。イエス様を救い主としてちゃんと受け止められる、そういう人たちが多くなった時でしょうか。そうではありませんでした。私たちは、聖書のこの先のことを知っていますので、その時の姿をよく知っていると思います。それは、人々のイエス様への憎しみが頂点に達したような時なのです。偽りの裁判がなされ、嘘に嘘を重ねるようにして出された判決によって、死刑が宣告さ

れる、その時なのです。つまり、人間の罪が噴出しているような時なのです。しかし、そこでこそ、イエス様の救いの御業がなされるのです。ですから、人間の状態がどうであるかに関わりなく、イエス様が十字架につかれる、命を捨てられるのです。

このことを確認する時に、私は大切なことが示されてくると思います。それは、イエス様が十字架におかかりになることは、私たち人間の側の思いや願いによって起きているということではないことです。「わたしの時」とイエス様が明確におっしゃっておられるように、イエス様が願われる時、つまり、神様が実現される時に起こることです。

ですから、私たちに求められていることははっきりとしていると思います。それは「信じる」ことなのです。「信じる」とは、何か人間の信念のようなものを指しているわけではありません。本来は「頼る」ということです。そして、今日のイエス様の言葉を前提に考えるならば、神様の救いの御業を「受け入れる」ことです。イエス様の十字架のよる救いの御業が、他の誰でもなく、この私のためであることを受け入れることです。そのことを、神様は私たちに何より求めておられるのです。

#### ・赦された者として

そして、この救いの恵みを自分のものとして本当に受け入れさせていただくために、どうしても通らなければならない入り口があります。それは私たちが罪人であるという真実です。「私たちは罪人」、これは、長く信仰生活を歩んでいる者にとっては、当然とそうだと受け取っていることだと思えます。しかし、これは単なるキリスト教の公式のようなものではありません。事実、私たちは「罪人」です。その罪を、自らの力では解決されないのです。そのことを、より深く、よりはっきりと知らされていくことこそ、救いの入り口なのです。ある牧師が、「信仰の成長とは、より深く自分の罪の現実を知ることだ」と言いました。罪の現実を更に深く知る。それは、決して絶望ではないのです。真の意味での救いの道が開かれることなのです。

私も昨年、教会の歩みのことで完全に道を見失っていたことがありました。そのことを通して、改めて自分が本当に大切なことを見失っていたことを受け止めさせられました。自分の罪の現実を見せつけられた思いがしました。しかし、同時にそこで知らされたのは、「罪の増し加わるころには、恵みもまた増し加わった」とパウロが言っていたことなのです。本当に大切なことを見失っていたこの自分を、神様はそれでも赦し受け入れてくださる。その恵みはいかに大きなことか。そのことを深く思わされたのです。そうして、神様の深い恵みを新たに受け止めながら、レントを迎えることになりました。そのことは、本当に感謝でした。

イエス様の言葉は、私たちの本当の姿を明らかにします。私たちが罪人であることを示されるのです。しかし、その罪人である私たちを赦す、つまり、神の子として生

きる道を開くためにこそ、イエス様は十字架にかかり、命を捨てられたのです。そこにこそ、神様の私たちの対する深い愛が示されています。聖書は、今日、私たちに向かって語ります。「信じよ」と。イエス様は、私たちに向かって「私が十字架にかかり、救いの道を開いた、その恵みを受け入れよ」と招かれるのです。そして、この恵みを受け入れるところにこそ、私たちが真の意味で新しくされて生きる道があるのです。神様の招きの声に応えて、信仰の道へと進み出たいと思います。そうして、私隊に対する限りなく豊かな愛を覚え、このレントの時を過ごしていきたいと、心より願います。